「備中兵乱」と城

備中松山城跡（小松山城跡）の本丸（高梁市）

三村氏と毛利氏との攻防！

天正２（1574）年から翌年にかけて備中国で起こった三村氏と毛利氏らとの争いは、「備中兵乱」として近世の地誌類や軍記物などで伝えられてきました。

応仁の乱以後、備中国守護であった細川氏の支配権が衰えると、備中国では庄氏、石川氏、三村氏、新見氏、多治部氏などの国衆が台頭し、勢力争いが起こりました。

天文21（1552）年に尼子晴久が備中国ほか６か国の守護に任ぜられると、多くの国衆は尼子氏に属しました。そうしたなか、三村家親は毛利氏の支援の下で尼子方の国衆との戦いで優位に立ち、永禄４（1561）年に本拠を鶴首城から備中松山城に移しました。その後、尼子氏の勢力が衰えると、毛利氏が備中制圧を進め、永禄５（1562）年に当主の毛利隆元が備中国守護に任命されました。

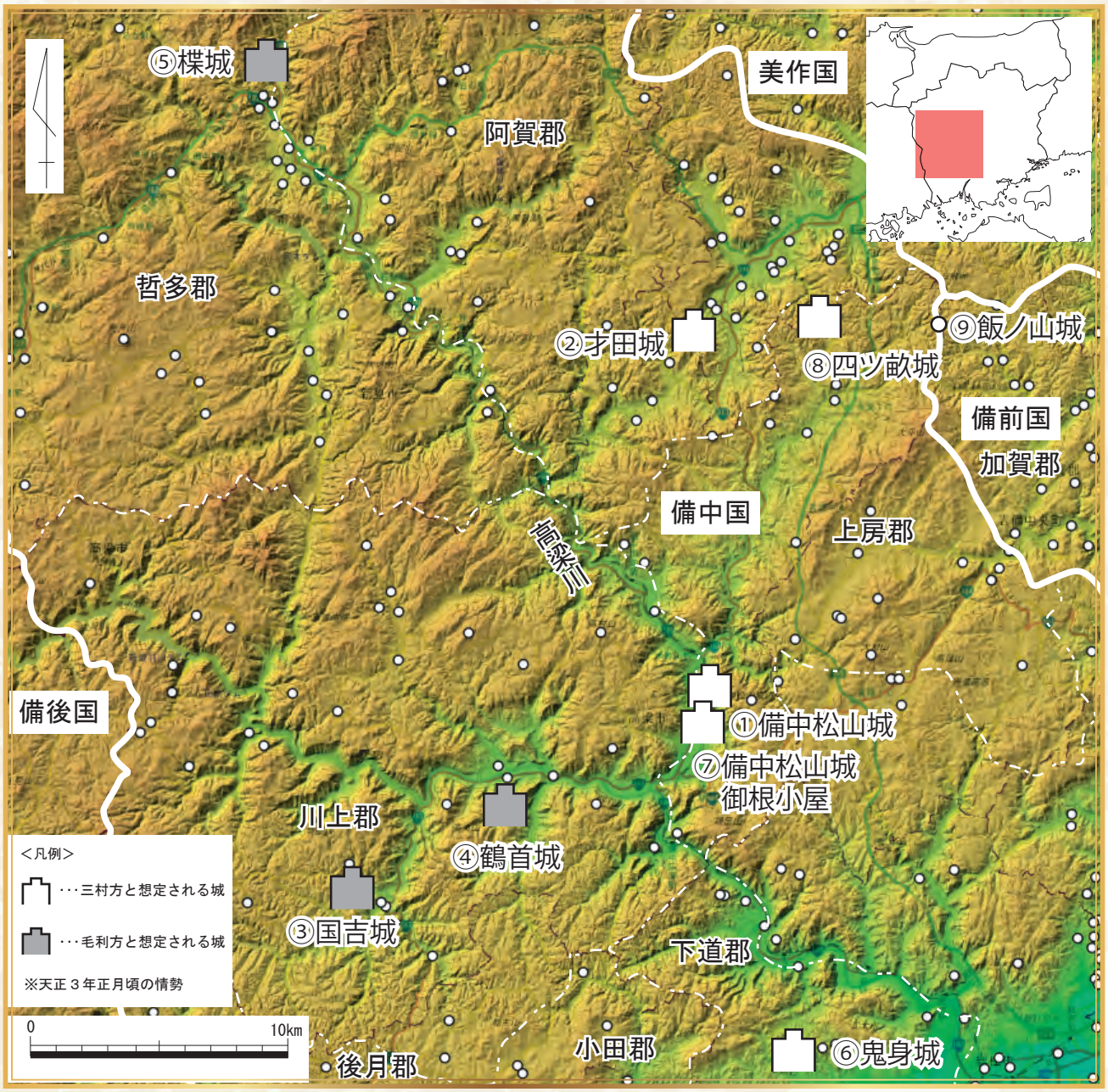
永禄９（1566）年、三村家親が備前国の宇喜多直家の刺客に暗殺され、その翌年には明禅寺合戦で家親の跡を継いだ三村元親が宇喜多勢に敗れました。元亀３（1572）年、三村氏と同盟関係にあった毛利氏が宇喜多氏と和を結んだことを契機に三村氏と毛利氏との間に確執が生じます。

天正２（1574）年８月、三村元親は毛利氏を離れて織田氏に通じます。これにより三村と毛利の戦端が切られます（備中兵乱）。12月に毛利氏の先陣を切って小早川隆景が国吉城を攻め、城内にいた籠城衆を全滅させました。

天正３（1575）年正月７日に鶴首城、その翌日に三村元範が籠る楪城、その後も毛利方の穂田元清が鬼身城を攻め、ことごとく毛利方の手に落ちます。そして５月には、ついに備中松山城が落城し、三村元親は自刃しました。最終的には、６月に備前国の常山城で小早川隆景が三村方の上野隆徳を討ったことで三村氏が滅亡し、「備中兵乱」は終結しました。

備中国を巡る戦国時代史

応仁の乱以後、備中国守護であった細川氏の支配権が衰えると、備中国では国衆が台頭し、勢力争いが起こりました。天文年間になると、躍進（やくしん）してきた尼子氏や毛利氏に国衆たちが翻弄（ほんろう）されるなか、三村家親は毛利氏の支援の下で備中国を制覇し、永禄４（1561）年に本拠を鶴首城から備中松山城に移します。その後、三村氏と宇喜多氏がたびたび争うなか、元亀３（1572）年に毛利氏が宇喜多氏と和を結んだことで三村氏との間に確執が生じ、「備中兵乱」が始まりました。天正２（1574）年から翌年にかけて、毛利氏は備中制圧のために城を次々と落とし、三村氏が滅びます。乱後、毛利氏は織田氏と結んだ宇喜多氏との争いが絶えず、天正10（1582）年の備中高松城の水攻めまで続きます。その顛末（てんまつ）として、天正13（1585）年に中国国分（くにわけ）が成立し、高梁川を挟んで備中国東半は宇喜多氏、その西半と備中松山城は毛利氏が領有することとなりました。



「備中兵乱」関連年表

年号（和暦）	年号（西暦）	備中国を巡る出来事	主な出来事
貞治元（正平17）	1362	南朝方に寝返った秋庭重明が備中国守護の高師秀を追放して①備中松山城に入る	
明徳４	1393	細川満之が備中国守護を任ぜられる	
応仁元	1467		「応仁の乱」が起こる
延徳４・明応元	1492	備中国守護代の庄元資が備中国守護細川勝久と対立する（備中大合戦）	
永正12	1515	守護（細川）方の多治部氏が新見荘に乱入し、新見・伊達氏と交戦する	
天文２	1533	庄為資が、秋庭氏の後に備中松山城の城主となった上野氏を討って入城する	
天文８	1539	尼子詮久が備中松山城を攻撃し、国内が争乱状態となる	
天文21	1552	尼子晴久が備中国他６か国の守護職に任ぜられる 尼子氏に与していた庄為資を毛利方の三村家親が攻撃する（第１次猿掛城合戦）	
永禄２	1559	三村家親が庄為資を再び攻撃した末に和睦し、猿掛城に三村氏が入る（第２次猿掛城合戦）	
永禄４	1561	三村家親が毛利氏支援の下、庄高資に替わって備中松山城に入る	
永禄５	1562	毛利隆元が備中・備後両国の守護職に任ぜられる	
永禄９	1566	２月、宇喜多直家が美作国久米郡興禅寺で三村家親を暗殺する	
永禄10	1567	宇喜多直家が三村方（三村元親・石川久智・庄元祐）を破る（明禅寺合戦）	
永禄12	1569	毛利氏が高屋城などを拠点にした藤井氏の反乱を鎮圧する	
元亀２	1571	三村元親が宇喜多方の②才田城を攻めるも敗退する	
元亀３	1572	毛利氏が宇喜多と講和する	
天正２	1574	宇喜多直家が浦上宗景と断交し、毛利氏と結ぶ	
		閏11月、三村元親は毛利氏の配下を離れ、織田氏に通じる（「備中兵乱」の始まり）	
		三村親成が備中松山城を退去し、毛利方につく	
		三村兵部が猿掛城を明け渡し、備中松山城に入る	
		小早川隆景が三村氏の③国吉城を攻める	
		三村左馬允が④鶴首城を退去し、備中松山城に入る	
天正３	1575	正月、三村元範が討たれ、⑤楪城が落城する	
		小早川隆景が伊与部山城に入る	
		小早川隆景が荒平山城を攻め、三村方の川西之秀が降伏する	
		上田実親が自害し、⑥鬼身城が落ちる	
		毛利勢が備中松山城跡（⑦御根小屋）を攻め、三村勢が城へ退く	
		毛利勢が川面（高梁市）に陣を移し、備中松山城を囲む	
		備中松山城の近くの村で毛利氏が麦薙ぎを行う	
		５月、備中松山城の天神の丸、大松山、馬酔木丸・勢籠が壇が次々と陥落する	
		三村元親・石川久式が本丸を退去し、備中松山城が落ちる	
		６月、三村元親が松蓮寺で自害する	
		毛利氏が常山城の上野隆徳を討ち、三村氏が滅亡する（「備中兵乱」の終わり）	
天正７	1579	９月、宇喜多直家が織田信長と結んで毛利氏と敵対し、備中国へ兵を進める	
		10月、反毛利方と宇喜多方の兵が⑧四ツ畝城に籠城する	
		毛利輝元、吉川元春が出陣し、四ツ畝城を攻略する	
天正８	1580	四ツ畝城が落城したほか、毛利氏は新たに⑨飯ノ山城を築城する	
天正10	1582	４月、羽柴秀吉が冠山城を攻撃し、落城させた後、宮路山城へも攻撃を開始する	
		５月、羽柴・宇喜多勢が清水宗治の守る備中高松城を包囲、水攻めにする	
		６月、本能寺の変の報を受け、秀吉は毛利氏と講和し、城主の清水宗治が自害する	「本能寺の変」が起こる
天正12	1584	毛利元清が猿掛城から茶臼山城へ移る	
天正13	1585	春、中国国分が成立する。備中国の高梁川以西と備中松山城は毛利氏が領有する	
慶長５	1600	毛利氏に替わり、小堀政次が備中国奉行として派遣される	関ヶ原の戦いが起こる
慶長８	1603		江戸幕府が開かれる
慶長11	1606	備中国奉行の小堀政一が備中松山城の改修を始める	
天和３	1683	備中松山藩主の水谷勝宗が備中松山城の改修を完成させる	

＜参考＞　内池英樹監修、加原耕作編『現代語訳　備中兵乱記』山陽新聞社　2020
畑和良「備中国の政治・軍事動向と城館」『岡山県中世城館跡総合調査　第２冊－備中国－』岡山県教育委員会　2020

● 現存天守、長大な城域、岡山県が誇る備中国最大の山城

①｜備中松山城跡（びっちゅうまつやま）

国指定史跡【高梁市内山下】

三大河川の一つ高梁川の中流域左岸で、標高487mの臥牛山（がぎゅうざん）に存在します。この山の尾根伝いに南北約1.8㎞に渡り、大松山（おおまつやま）、天神（てんじん）の丸（まる）、小松山（こまつやま）、前山（まえやま）と呼ばれる四つの峰上に展開する山城です。また臥牛山南側山裾に、近世期の藩庁跡である御根小屋（おねごや）跡（現県立高梁高等学校）が存在します。現在、山城部分は国指定史跡、藩庁部分は県指定史跡となっています。

延応２（1240）年、有漢郷（うかん）の地頭秋庭三郎重信（じとうあきばさぶろうしげのぶ）が大松山に城を築いたのが初めと言われています。その後、高橋氏、備中国守護高氏、再び秋庭氏、上野氏、庄氏がこの山城に入ります。天文年間には、尼子氏の城番が置かれ、その後、鶴首城主三村家親は毛利元就の力をかりてこの山城を手中に収めます。天正２～３（1574～1575）年の「備中兵乱」では、家親の子元親が討たれ、この城は毛利氏の支配下に入ります。この頃には「砦二十一丸」と呼ばれ、全山が要塞化され長大な山城になったようです。

その後、毛利氏、備中国総奉行小堀（こぼり）氏の改修を経て、寛永（かんえい）19（1642）年に水谷（みずのや）氏が入城、天和（てんわ）元（1681）年に小松山と御根小屋の大修復を行い、現在の近世城郭となっていきます。最後の城主は板倉勝静（かつきよ）で、明治６（1873）年には太政官達（たっし）により廃城となりました。

この城は、小松山とその南側が近世城郭化されますが、城域の北側は、天神の丸や大池など一部を例外として、大松山の周辺などでは中世山城の様相がそのまま残っています。中世山城と近世城郭が、一つの場所で観察できる貴重な城跡でもあります。

遠景 ※

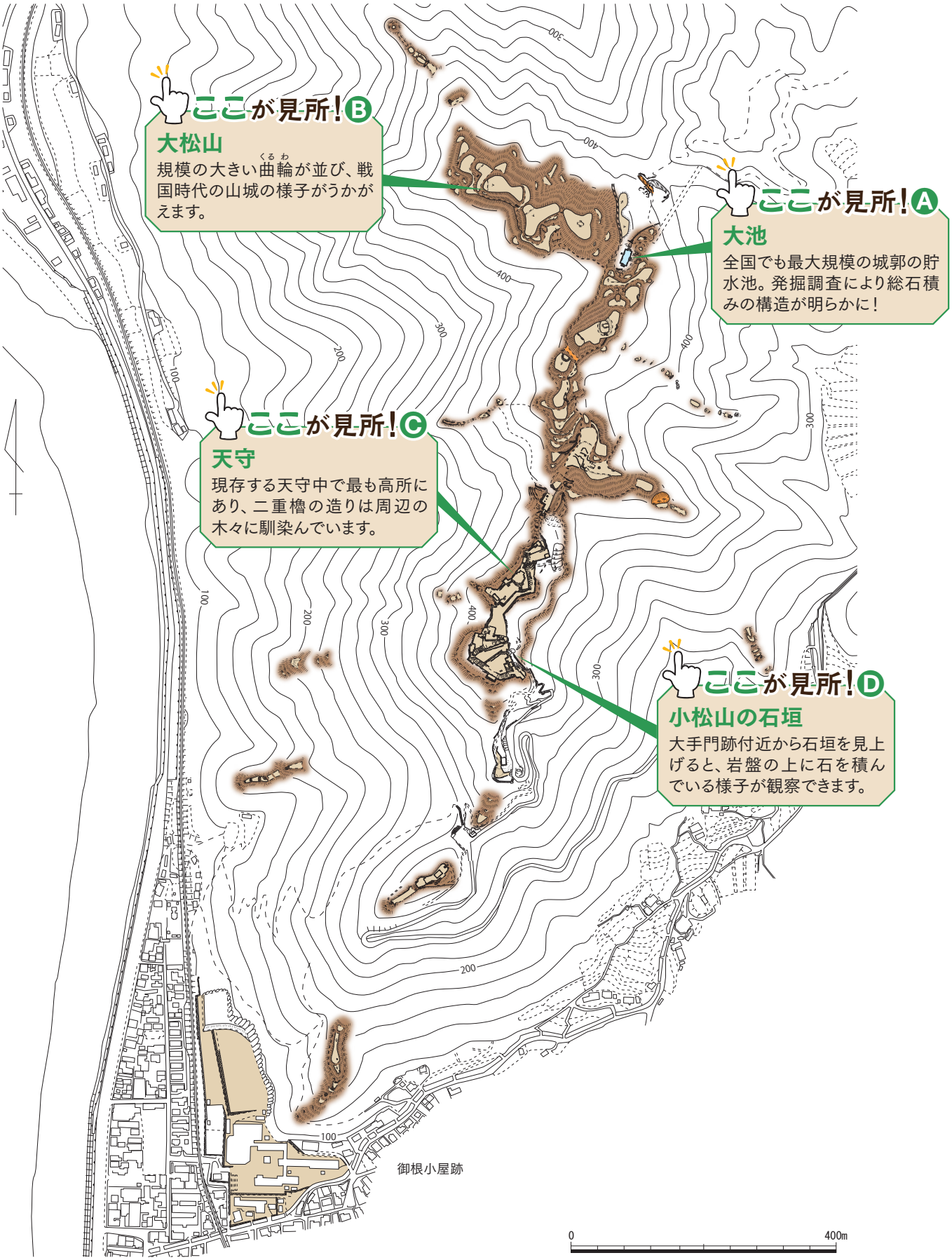
大池 ※

大松山城跡三の丸石積み

天神の丸跡 ※

（※写真提供：高梁市教育委員会）

備中松山城跡の縄張りと特徴



縄張り　1/8,000

④ | 鶴首（かくしゅ）城跡

【高梁市成羽町下原】

標高320m鶴首山の山頂から尾根筋にかけて幾重にも曲輪を築いた、いわゆる連郭式の山城です。眼下には東西方向に走る成羽川と、現在の高梁市成羽町の街地が見渡せます。街地の中央にはかつて三村氏居館跡があり、陸路と舟路を抑える要衝に築かれた山城でした。

伝承では、鎌倉時代に河村四郎清秀（かわむらしろうきよひで）が築城したと言われます。その後、天文２（1533）年に星田荘（ほしだのしょう）（現井原市美星町）から三村家親が入城し、整備・拡張を進めたと考えられています。天正２～３（1574～1575）年に起こった「備中兵乱」では、三村方の山城として登場し、国吉城落城に次いで早々に毛利方へ開城されました。乱後、三村方で唯一毛利についた三村親成（ちかしげ）が城主になります。この頃、主郭周辺の石垣等が改築されたと考えられます。元和３（1617）年頃に破却されました。

城域は南北500m、東西560mを測り、備中国では備中松山城とともに最大規模の山城です。山頂付近の本丸と、北東方向に延びる尾根筋上にある二の丸周辺を中心に遺構が広がり、また登山路の途中に太鼓（たいこ）の丸（まる）があります。本丸頂部にある主郭は、一辺が30mほどある広い平坦地で、三方に石積みが築かれます。虎口部分には、櫓台と思われる施設も付随します。主郭の周辺には、規模の大きい曲輪、切岸、竪堀群などを築き、守りを固めています。

北東尾根筋にある二の丸は、前後に小さい曲輪を幾重にも連ねる構造です。一説では、この二の丸が古く、三村氏在城の時に山頂付近の本丸を整備し、城域を拡張したと言われています。

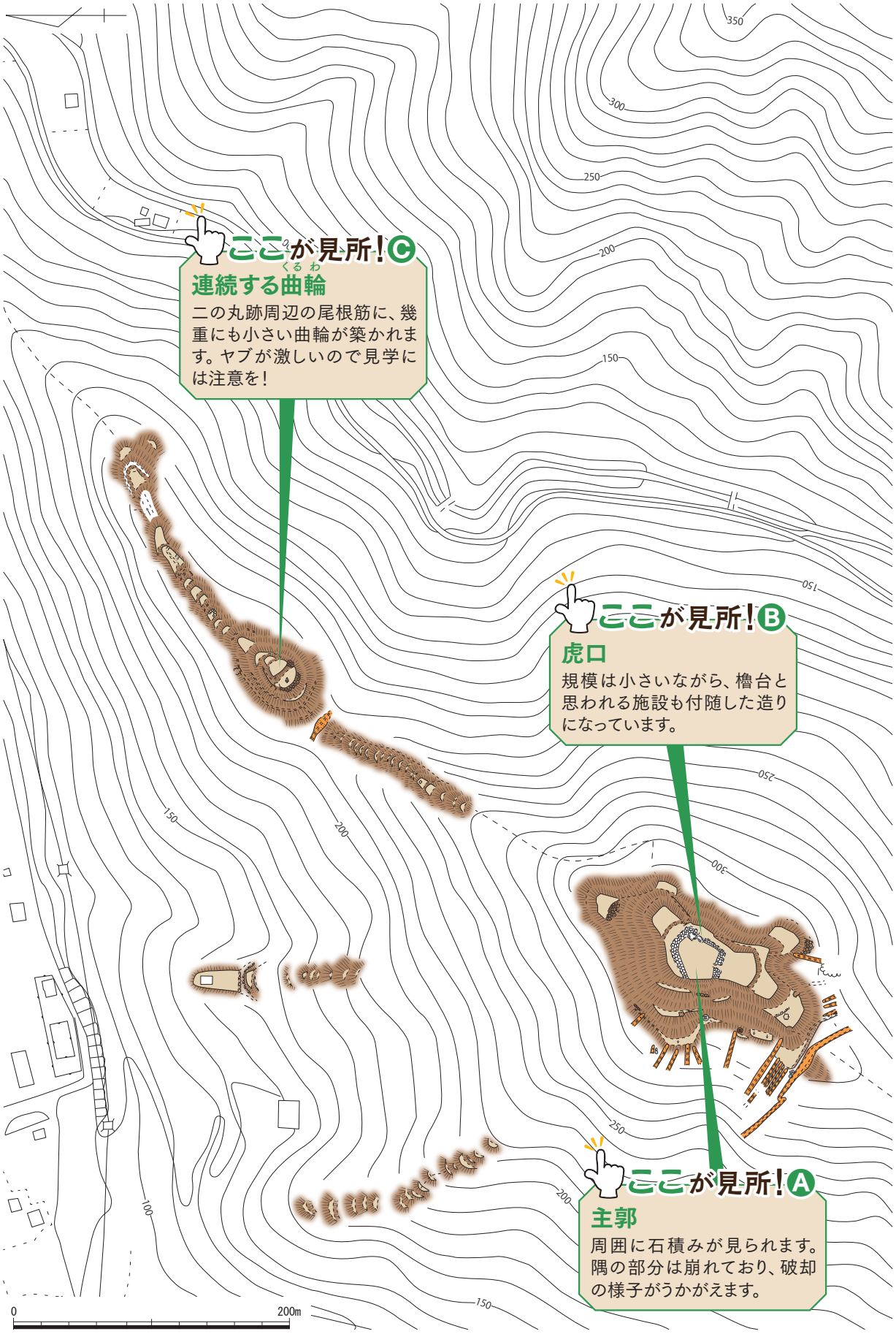
遠景

本丸主郭の石積み

本丸の虎口

太鼓の丸

鶴首城跡の縄張りと特徴



縄張り　1/4,000

● 関連する城館

③｜国吉（くによし）城跡｜市指定史跡【高梁市川上町七地】

遠景

高梁市の西側にある全長200m強の連郭式山城です。天文年間頃から三村氏配下の山城であり、「備中兵乱」の時には真っ先に毛利方の攻撃目標とされたため、降伏を許されませんでした。『備中国手要害合戦頸注文（びっちゅうのくにてようがいかっせんくびちゅうもん）』には、その時の首級のリストが記され、戦闘の生々しさを今に伝えています。

⑤｜楪（ゆずりは）城跡｜市指定史跡【新見市上市】

遠景

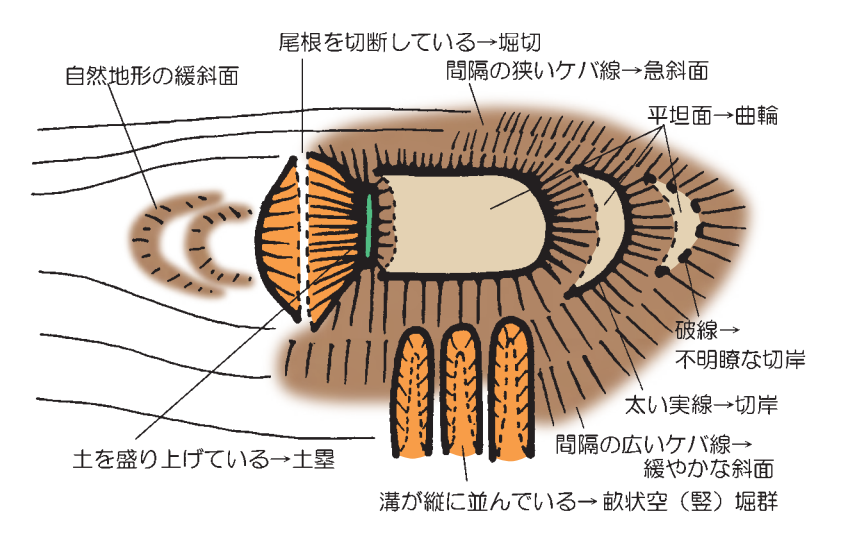
城域より780mと南北に長く、かつて「新見荘（にいみのしょう）」のあった地域の中核をなす山城です。この山塊より1.3km離れた山裾付近で、祐清（ゆうせい）が殺害されたと言われます。伝承では、新見氏によって築城され、永禄13(1570)年から三村元範（もとのり）が入り、「備中兵乱」では早い時期に毛利方の攻撃を受け、元範は討たれます。その後は、毛利方の今田経高（つねたか）が在番します。

⑥｜鬼身（きのみ）城跡｜市指定史跡【総社市山田・下倉・久代】

曲輪

総社市の西側にあり、山裾には玉島往来が走っていました。主郭からは、南側にある新本川流域が広く見渡せます。「備中兵乱」の時には、三村方の城として毛利方の攻撃を受け、上田実親（さねちか）が自刃し開城します。乱後には毛利氏の一門である宍戸（ししど）氏が入城し、今も残る虎口やその周辺の石垣を整備したと考えられています。

山城の縄張り図では、ケバ線で山の斜面を表現します。
ケバ線の元が斜面の上方で、先が下方になります。ケバ線の向きはその地点の領斜方向を示し、密度が濃いと急斜面で、薄いと比較的緩やかな斜面です。



【縄張り（なわばり）】
城の基本設計で、曲輪、堀、土塁、出入口（虎口）などの遺構の配置や組み合わせのこと。

【曲輪・郭（くるわ）】
尾根や斜面を造成してつくった平坦地。中心となるものを主郭又は本曲輪（後の本丸）という。このほか、主郭を取り巻く細長い帯曲輪、主郭から下った場所に設けられた腰曲輪がある。

【切岸（きりぎし）】
敵の侵入をはばむため、曲輪周囲を人工的に切り崩した急崖。

【堀（ほり）】
城の防衛施設で、尾根を断ち切るように掘られた堀切、山の斜面に沿って掘られた竪堀、竪堀を連続して並べた畝状空（竪）堀群、曲輪の周りを取り巻くように掘られた横堀がある。

【土塁（どるい）】
曲輪や堀の縁辺に土を盛ってつくった防御用の高まり。

【出入口（でいりぐち）・虎口（こぐち）】
城や曲輪の出入口。直線的、のぼり坂、屈曲した通路や門の前後の広場を組み合わせたものがある。

【発　行　日】 令和７年12月
【発行・編集】 **岡山県古代吉備文化財センター**
〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-3
電話 086-293-3211　FAX 086-293-0142
https://www.pref.okayama.jp/site/kodai
※ホームページで岡山県中世城館跡総合調査報告書を公開中！
（左の二次元コードからご覧になれます。）

※注意事項
- 城館跡の多くは個人の所有地です。場所や季節によっては立入りが制限されているところがあります。見学に際しては、立ち入りに十分注意し、マナーを守って行動しましょう。
- 見学するときは、野外活動に適した服装を心がけ、十分に注意しましょう。
- クマ、イノシシ、マムシ、害のある虫や植物などに気を付けましょう。
- 自分の位置を確認するため、方位磁石、地図やGPSなどの活用をおすすめします。
- 城館跡は貴重な文化財ですから、大切にしましょう。